

大和王権と鎮魂祭

民俗学の王権論：折口鎮魂論と文献史学との接点を求めて

Yamato Imperial Authority and the *Chinkonsai* :
Theories on Imperial Authority in Folklore Studies ; Searching for
Common Ground for Origuchi's Theory on *Chinkon* and Documented History

新谷尚紀

SHINTANI Takanori

はじめに

①二重王権論の視点から

②内と外の弁証法

③新嘗祭と大嘗祭

④鎮魂祭の歴史

⑤鎮魂祭の解釈

論点—折口鎮魂論と文献史学との接点—

【論文要旨】

結論は論文末にまとめてあるが、その要約は以下のとおりである。(1) 超越神聖王権としての性格を実現した天武・持統の王権の段階では、大嘗祭と伊勢神宮祭祀は実現したが、鎮魂祭の整備にまでは至らなかった。(2) 鎮魂祭の内容を記す最古の文献は9世紀後期の『貞観儀式』であり、その段階での主要な要素としては、①神宝、②御衣匣、③御巫が宇気槽を覆した上に立ち杵でその槽を十度撞く儀礼、④神祇伯が笥中に木綿を結ぶ儀礼、⑤媛女舞、の五つが目目される。8世紀の大室令制下の鎮魂祭においてもその③と⑤の伝承は存在していた可能性が大である。(3) 『貞観儀式』にみえる神祇伯が木綿を結ぶ儀礼は大室令以来存在していたが、その段階ではまだ「産霊」や「魂」という文字で表される清音の「むすひ」の観念とは結びついてはいなかった。その両者が結びついていったのは『延喜式』の神八座の勧請を記す段階の前後であった。「産霊」への祭祀ではなく天皇の「鎮魂」の意味が本義であった。(4) 9世紀後半の貞観期という古代国家の大きな転換期を前にした時点で、藤原良房の後ろ盾のもとに幼帝清和という「祭祀王」が誕生し、逆にそれまで大和王権が必用不可欠としてきた「〈外部〉としての出雲」を必要としなくなる段階、つまり、新たに「内なる〈外部〉」としての摂関や内覧という「世俗王」的な装置を創り出していく段階で、呪的で霊威的な王権儀礼としての鎮魂祭が、大室令以来のいわば第一期鎮魂祭の段階から、より整備された第二期鎮魂祭の段階へと進んだことが想定される。(5) 鎮魂祭という大和王権の「祭祀王」として必要不可欠な王権儀礼の創生が、天武・持統の段階で胎動し、律令王権としての文武・元明・元正の令制下で誕生し、清和以降、新たな整備を達成していくものととらえることができる。このような視点に立つとき、「発生」論、「本義」論的な折口鎮魂論と、文献史的な歴史展開の解説論とが協業可能となる。

【キーワード】 大嘗祭、第一期鎮魂祭、第二期鎮魂祭、貞観儀式、祭祀王、むすびとむすひ